

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 森永美保姉

開 会 招 詞 ヨハネの黙示録3章20節

* 賛 美 歌 2:1 (ソングシート)

1. 主のみいつとみさかえとを こえのかぎりたたえて、またき愛とひくきころ

御座(みざ)にそなえひれふす。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去って
ください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、
母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも
白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜び
を再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この
口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)
罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 2:2 (ソングシート)

2. ゆだねまつるわが重荷を主はかわりて負いたもう なやみおおき世の旅路も
主のいませばやすけし。アーメン

共同の祈禱 祈禱書5 ニケア信条

我らは、唯一の全能の神、天と地と、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を信ず。

我らは、唯一の主、神の独り子、イエス・キリストを信ず。主は、あらゆる世のさきにみ父より生まれ、神よりの神、光よりの光、造られずして生まれ、み父と同一の本質にいます真の神。万物は彼によりて造られた。主は、我ら人間のため、我らの救いのために天より降り、聖霊によって処女マリアより受肉して人となり、我らのために、ポンテオ・ピラトのもとに十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書に従って三日目によみがえり、天に昇り、み父の右に座し、生ける者と死ねる者とを審くために、栄光をおびて再び来たりたもう。その御国は終わることがない。我らは、生命の与え主にして、主なる聖霊を信ず。聖霊はみ父と御子とより出で、み父と御子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語りたもう。我らは、唯一の聖なる公同の使徒的教会を信ず。我らは、罪の赦しのための、唯一の洗礼を告白す。我らは、死人のよみがえりと、来たるべき世の命とを待ち望む。アーメン。

献 金 (黒) 教会活動 (赤) アフリカ飢餓 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 イザヤ53章7-10節 (旧約聖書1150頁)

ヨハネ1章29-34節 (新約聖書164頁)

説教・祈祷 「イエスが来る」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 30:1-2

1. いともとうとき主はくだりて 血のあたひもて 民をすくい きよき住居をつくりたてて
そのいしづえとなりたまえり
2. 四方のくにより えらばるれど のぞみもひとつ わざもひとつ ひとつのみかて ともに受けて ひとりの神をおがみたのむ。アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 64

みめぐみあふるる 父、み子、みたまの ひとりのみ神に みさかえつきざれ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老 (司会・受付 次週：雨宮信長老)

本日 受付 1階：星野房子・加藤良明執事 2階：大日南信也執事 / ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週 受付 1階：加藤良明・若月学執事 2階：森永美保執事 / ZOOMホスト・録音：番場駿也

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

ヨハネ1：29-34 イエスが来る

やってくるイエス

今日の聖書では、29節のイエス様がやってこられるところと、34節の証した、という言葉が粹になっています。少々単純に言ってしまうと、イエス様がやってきた、それを見たヨハネが証をした、言葉を発した、というのがこのところのあらすじ、と言ってしまうでもいいのです。イエス様を見た、そこでヨハネは熱心に話したということです。出来事だけを見れば、単純です。しかし、ヨハネの言っていることを読みますと、あまり単純ではないようにも見えます。むしろ、本当にこんな言葉を立て板に水で、すらすらと話したのかなあ、と思わなくもありません。もちろん、これは福音書として書かれたものですから、ずいぶん言葉が整えられていると言ってしまうばそう言えるかもしれません。しかしやはり洗礼者ヨハネが語りだした、イエス様について熱心に語った、これは事実のはずなのです。そして、そのように語るためには、その前にあるものが大切なかもしれないのです。

イエスを見る前に

例えばこれは神学校時代だったと思いますが、説教の学びの中でこんなことを教えられました。牧師が説教を語るのは、鳥がさえずるのに似ているというのです。牧師さんそんなにかわいらしくない、と思われましたら申し訳ありませんが、鳥もそのままでは鳴かないらしいのです。有名なところでは鶯があります。あのホーホケキョというのは、練習してあなるらしいのです。まだ、練習が足りないと感じたホーホケキョにならなかつたりします。同じように、牧師もそうですし、あるいはキリスト者の生活全般でもそうかもしれないのですが、教会で何かを語る、祈りをする、といったことについて、自然と言葉が口をついて出てくる、というためには、それなりの準備があると言えるはずなのです。そこで話を元に戻しまして、今日の所でヨハネが、「私の後から一人の人が来られる。その方は私に優る。私よりも先におられたからである」ということを言っているのですが、これもまた、この時に思いついて、口から出まかせを言っているのではもちろんですが、むしろ、この言葉が出てくるための時間の積み重ねがあったと考えるのが自然です。ちなみにこの言葉は、同じヨハネ1章の15節でも語られています。おそらく、ヨハネは、これを何度何度も、確信をもって周りの人たちに、とりわけヨハネの所に集まってきた弟子たちに向かって語っていただろうと思われるのです。

ヨハネの役割

そして、そのような言葉は、色々なヨハネの体験から生まれたもののはずです。洗礼者ヨハネの誕生についてはルカ福音書に詳しく描かれていますけれども、彼は、祭司ザカリヤとその妻エリサベトの間に生まれています。この夫婦は「主の前に正しい人だった」（ルカ1：6）とされています。神様との信仰に生きていた、神の国の現れるのを期待して誠実に生きる人たちだったのでしょう。当然ヨハネは、この両親から、神様について、また、聖書について学んだはずで、あるいは同じルカ1：14では、「母の胎にいる時から聖霊に満たされている」という言葉もあります。ヨハネがヨハネになっていくためには、そのような神様の導きともいえる環境がまずあったのでしょう。そのような中で、だんだんとヨハネは自分の役割がなんであるのかを気付かされていったのです。それが例えば31節の言葉になって表れているのです。もう一度読んでみます。「わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、私は水で洗礼を授けに来た」。ヨハネの行動には、ブレがありません。わたしはこの方を知らなかった、というのは、後から来る世を救う小羊が、どのような人か、分からなかったという意味のはずです。具体的にどのような人が来るのかは知らなかったけれども、来ることはわかっていた、むしろ、そのような人が現れてくるように、自分は水の洗礼をするように神様から遣わされた、だからそれをして、というように、自分が何者で、何をすべきか、彼は見通しが立っていたというのです。

私たちの役割

そこで話を元に戻しまして、何かを見て語る、という場合に大切なのは、このヨハネに見られるような世界に対する見通しです。わたしはこの事をこう思う、とはっきり言えるためには、世界とはこうい

うもので、こう動いていて、という見通しが必要です。それは例えば、ヨハネの言葉においてははっきりとします。彼がこのところで語っているのは、この世界の昔と今と未来です。「私の後から来る方」は確かに神様が遣わしてくださる方だ。そしてその人は自分よりも偉大である、なぜなら、この特別な人は、自分よりも先から、この世界に先立って存在していた人なのだ、自分は、その人のことについて、詳しくは知らないけれども、自分が洗礼を行っているのはもっぱら、その人が来る備えををするためなのだ、というように、この世界の昔と今とこれからが見えている、ということです。いわば信仰の土台が据わるのです。そして実は、このような世界観を持つのは簡単なことではなく、むしろ、私自身もそうですが、おそらく一生かけて、コツコツと作り上げていくようなものかもしれないのです。しかし、はっきりしていることがあります。それは、いずれにしても私たちは、このところでヨハネの言葉がわかるようになることが求められている、このヨハネの言葉を退屈な言葉、理屈の言葉としてではなく、自分に関わる言葉として、この言葉を聞きとるようにと招かれているのです。

知らなかった

その点で、洗礼者ヨハネは、ここで大変率直な言葉を語っています。31節で、「わたしはこの方を知らなかった」とはっきりというのです。その場合にヨハネは、すでに先ほどお話しました通り、ザカリヤとエリサベトの子で、エリサベトとマリアは叔母と姪の関係でしたからイエス様とは親戚関係で、知らないはずはない、というようにも言えるのです。しかし、このところの「知らない」はそのような意味での知らないではないようです。では何なのかですが、このところでヨハネが言っている「知らなかった」というのは、イエス様こそが、神様が教えて下さったような方である、まさに「神の小羊である」という意味で、イエス様を知ることがいままでなかった、しかし、それがはっきりとわかるようになった、見た瞬間に分かった、イエス様が誰であるのかが分かった、このように言っているのです。そのようにしてイエス様を見て、それが誰なのかわかった、その衝撃、その驚きを語るのが今日の所の言葉です。そしてヨハネが、そのような「あつ」と思う体験をしたのは、おそらく、イエス様の洗礼の時です。不思議なことに、ヨハネによる福音書では、ヨハネがイエス様に洗礼を受ける場面は登場しません。しかし、このところの32節はそのような洗礼の様子を語る言葉です。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。」これを見たときに、一種ににしてすべてが頭の中で結びついた、というのです。

与えられる視点

しかし、ヨハネの証言はこれで終わらないのです。じつは、このようにして、洗礼の時に何が見えるのか、また、そもそも、そのようなことが見えるようになる、という事実そのものも神様が教えて下さったのだ、というのです。それが、33節の言葉です。「わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を受けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』とわたしに言われた」。ここでまず大切なのは「私を遣わした方が...私に言われた」という言葉です。ヨハネを遣わしたのは言うまでもなく、神様ご自身です。その神様が、一切を教えて下さった、というのです。もっと言えば、そもそも全くあたり前の話ですが、イエス様を見て何が見えるか、何を見ることができののかを決めるのは、人間ではなく神様ご自身が決められることです。そして、洗礼の時にヨハネが、見るべきものが見えたのは、神様がそれを与えてくださったからです。イエス様の上に霊が下ること、そしてその霊がイエス様の上にとどまっていることが見えたこと、これらはすべて神様が与えてくださったのだというのです。

イスラエルのため

そして、このようにして、ヨハネが特別な体験をしたのは、ただヨハネ一人にとどまることではないのです。ヨハネ自身がそのことをはっきりと語っています。それが、31節にあります「この方がイスラエルに現れるため」とある言葉の意味です。ちなみに、ここではイスラエルという言葉があえて使われています。あるいはこの後49節を見ますと、ナタナエルがイエス様に向かって「あなたはイスラエルの王です」と告白しています。それに対して、1章19節を見ますと、「エルサレムのユダヤ人たち」とい

う言葉があります。彼らが祭司やレビ人をヨハネのもとに遣わした、という話ですがそれはともかく、ここではっきりとするのは、ヨハネによる福音書では、民族的な意味では、「ユダヤ人」が使われているということです。さらに言えば、ユダヤ人という言葉は、イエス様に反対していく立場の人たちを指す言葉として使われていると言えます。一方で、イスラエルという言葉は、意識的に、神様に従う人たちを指す言葉という意味が割り当てられています。最初に、ヨハネの父と母、ザカリヤとエリサベトは正しい人たちだった、ということをお話ししました。その場合の正しいとは神の国を待ち望む人たちという意味でした。全くその意味で、ヨハネにおいてイスラエルとは、このように神様の国を待ち望む人たちを指しています。その人たちの前にイエス様が現れる、その手伝いをするのが自分の役目だ、とヨハネはここで言っています。

見たことを語る

いうまでもないことですが、このようにして神様の国を待ち望む人、いや、この地上で神様の国に生きようとする人たちの流れの中に、私たちも入っています。私たちもまた、神様の国に生きる者たちの一人です。そのように神様から呼ばれた者たちです。あるいは、いやまだキリスト者になっていない、という方であっても、そこに入るように呼ばれている人たちです。そのような人たちの前に、イエス様が現れるように、わたしはやってきたのだし、また、こうして言葉を語っている、証言をしている、というのです。見たことを、見たとおりに語っているのだ、というのです。「私はそれを見た、この方こそ、神の子であると証しをしたのだ」と34節にある通りです。こうして、ヨハネは、いわばイエス様を、私たちの前に差し出しているのです。ほら、私はこのような方としてイエス様を見た、と言って差し出しているのです。

イエスが来る

そして、私たちが、この言葉を受け止めるのなら、私たちのこのところに、イエス様が来られるのです。私たちの中に、いまこの私たちの間に、先ほどのナタナエルの告白が生まれるのです。「あなたは神の子です。あなたは私たちイスラエルの王です」という告白が生まれていくのです。そのようにして、ヨハネの前にやってきたイエス様は、それを見たヨハネのことばを通して、私たちの中にやってくるのです。

祈り

父なる神様、貴いみ名を賛美します。あなたは御子を私たちと出会わせてくださいますから感謝します。私たちは今既に、イエス様の弟子にされています。イエス様と出会っています。この出会いの喜びを、決して忘れることなく、何度でも、新しく味わいつつ歩むことができますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン